『タイムリミット』

作者　淺羽　一

何時の頃からか決めていた。生まれてから丁度一六年の間は生きることを試してみようと。それまでは絶対に何があっても、何もなくても生き続けようと。そしてそこから先は一六年目のその日に決めようと。

今朝、私が目を覚ました時には既に母親は働きに出ていて、食卓の上には朝食用のお皿とお箸が巾着袋に入れられたお弁当箱と一緒に並べられていた。

いつものことだ。両親が離婚して小学校を変わって以来、平日と言えばほとんど毎日がこれの繰り返しだ。きっと冷蔵庫を開ければ卵焼きと小盛りのサラダがあるに違いない。私のお弁当を作った時の残りだ。昨夜の夕食の残りだけでは物足りなかろうという母親の気遣い。本当ならとてもありがたいと感謝するべきなのに、それでも私は毎日冷蔵庫やお弁当箱の蓋を開ける度に、朝も昼も夜も同じ物ばっかりだなと憂鬱になる。

私は冷蔵庫を開けるどころかそれに触れもしなかった。起きたばかりの喉の渇きは浄水器付きの蛇口から出る水を飲んで紛らわした。神経質なほど無臭の水道水は美味しくないが不味くもなかった。

身支度を調えてアパートの部屋を出た。最近はついつい手抜きをするけれど、今朝は普段より少し時間を掛けて髪をブローしたし歯も磨いた。朝食を抜いた分、それでも遅刻する心配は要らなかった。お弁当箱はそのまま食卓の上に残しておいた。

学校は退屈だった。でも辛くはなかった。地元の公立高校はあまり優秀でない分さほど授業に厳しくもなく、学内に親友と呼べそうな相手がいなくともクラスの中で常に孤立しているわけでなく、誰かにイジメられたり誰かをイジメたりということもなく。男女問わず話し掛けられれば応えたし、話し掛ければ応えられたし、時には下らない冗談で笑い合ったりもした。ただ、昼休み中にお弁当を他の誰かと一緒に食べた記憶は久しくなかった。

呆気ないほどに過ごしやすい学生生活は、今日もまた変わらない。教室に入り、目の合った数人と上っ面の笑顔で「おはよう」を交わし、それ以上のやりとりは特になく、私は席に着き彼女達はまた元の会話に戻っていく。やがて担任が来て、授業が始まり、休み時間になって、また授業が始まり。お昼には月末らしく財布にあった最後の千円札を使って久しぶりに購買部で小さな菓子パン一つと紙パック入りのお茶を買い、そこだけは少し普段と違っていたけれど、後はそそくさと教室に戻って元通り。たまのトイレと教室移動、それらを除けば今日みたいな例外がない限りまともに自分の席から立つことさえない。いつも通り繰り返されるいつも通り。

まるで置物みたいだな、と時々ふと自分でも悲しくなった。そう、悲しいのだ。でもそれじゃあ寂しいのかと言えば、それはちょっと違う気がした。

例えば、と考えた。もしも私がある日突然に死んだとしたら、彼らは一体どういう風になるのだろう。

自分で言うのは恥ずかしいけれど、おそらく女子の大半は泣いてくれると思う。中には男子だっているかも知れない。それほど親しくなくてもそうだと思う。だって私が仮にその立場ならそうに違いない。嘘泣きってわけじゃない。甘い香りに嬉しくなって、嫌な臭いに気分が悪くなるように、その場の空気次第で瞬間的に楽しめるし或いは急に悲しめるのだ。変に呼吸を止めたって自分一人が息苦しくなるしかない。

でも、とも思う。空気は簡単に入れ替わる。そうでなくても人は慣れる。びっくりするほどに嫌な臭いだってしばらく嗅げば気にならなくなる。そうならないほど強烈な刺激を

持った空気を生み出すには、多分だけれど、私一人の死くらいじゃ足りない。それこそクラスの真ん中で泣き叫びながら焼身自殺でもしない限り無理だと思う。そして私には言うまでもなくそんなことをする意志がない。

学校も終わり、結局やはり何事もなく、制服姿のままで一人夕暮れ前の街を歩きながら苦笑した。いつかテレビの罰ゲームで見た世界一臭い缶詰。自分の命なんて、魚のニシンを発酵させたらしいその食品にさえ敵わないのかも知れない。

一六年間ずっと生きてきて、ようやく肩を並べられたものが罰ゲーム用の輸入食品なんて、こんなに惨めな話もない。だけどそれを否定しようと過去を振り返っても、どうにも払拭出来そうな記憶がない。

親の離婚で引っ越す時に友人らと交わした「ずっと仲良しでいよう」って約束は、残念ながら幸せな日々という香水の余韻でしかなかった。転校してすぐに仲良くなった女子はいた、けれどふとした拍子にイジメられることになった彼女をつい避けてしまったら、やがて問題が解決してからもそのままだった。中学時代半ば、大人気のロックバンドのボーカルが自殺して、自分も含め生前に彼らを好きだと言っていた人はその証拠として後追い自殺をしなければならないみたいな空気が流れた。そしていよいよ誰が最初にやるかって皆の緊張がピークに達した頃、そのバンドのリーダーが『彼のことを真に愛している人にこそ、彼の分まで生きて欲しい』とメッセージを発して、途端に誰もが口々に「自殺なんて絶対に駄目だよ」と言い出した。あの時は心底から冷めたことを覚えている。自分だってまさか本気で自殺しようと決意していたわけでもないくせに、何て中途半端な連中ばかりだと馬鹿にしたものだ。そして、せめて自分だけはもう少しマシな人間だと思い込みたくて…。

あぁ、そうかと気付く。自分の頭の中で一六年間の期限が設けられたのは、あの頃だったのかも知れない。だとすれば何て子供じみた話だろう。本当に馬鹿みたいだ。だけど今更どうしようもない。だって馬鹿みたいな生き方をずっと続けていたと言うことは、つまり自分が本物の馬鹿だって証拠なのだから。どうやら、やはり私はお馬鹿なテレビ番組で出てくる小道具みたいなものらしい。そう開き直ったら、少し楽になった。

胸の奥底で、既に準備していた蝋燭に静かに火が付いた。まさにそんな感じだった。

幾分か軽くなった足取りで、視線の先に見つけたコンビニへ向かった。

今日一日、携帯電話は一度も鳴っていない。高校生になってから持ち始めた携帯電話に登録されているアドレスは他の同世代と比べて多いのか少ないのか。どうなのだろう、分からない。分かろうともしてこなかった人生だ。

決めていたのだ、昨日の晩に。この世に生を受けてから一六年。誰か一人からでも「おめでとう」と言われれば、自分の人生にもまだ続ける意味があるのかも知れないと。もしくはすがっていた。誰か一人でも良いから私のことを覚えていてと。自分から誰かの誕生日を祝福するなんてろくにしないのに、そんな事実は棚上げにして。母親にすら去年も一昨年も、そしてどうやら今年も忘れられているような人間なのに。

コンビニの自動ドアが開くと同時、「いらっしゃいませ」と大きな声がした。正直、苦手だった。

学校の規則で禁止されている以前に、どうしても母親がアルバイトを許してくれず、自由になるお金と言えば必要な物を買う為以外に母親から毎月渡される定額だけ。それが不

満と言うよりも、小さなスプーンでパフェを削ぐようにして食べるみたいな買い物にも丁寧な接客態度を取られると気が引けた。次々と新商品が入れ替わり、同系列でも店舗によって異なるコンビニのスイーツを色々と試してみるという趣味も、元を辿れば店員から顔を覚えられないようにいちいち違う店を探していたのが始まりだ。

デザート売り場には和洋問わずスイーツが並んでいる。和菓子も嫌いじゃないけれど、やっぱり今日だけはケーキが良かった。

私は真っ直ぐに店内を進んだ。

あった。いきなり見つけた。柔らかそうなスポンジ生地と厚めに塗られた生クリーム、黄色と白の層が美しい断面に、差し色のように苺が映えるショートケーキ。ホールケーキじゃない点を除けばまさしく理想の「お誕生日ケーキ」だった。しかもそれは新作らしく、値札の横には〈厳選された国産材料だけにこだわり―〉と紹介文の載る写真まであった。

値段はおよそ五〇〇円だった。高い。いつもなら二回か三回に分ける金額だ。でも私は迷わずそれを手に取った。普段は一円の単位まで気にする身分でも、せめてこんな時くらい気持ちよくいきたかった。そして私は紙パック入りでなくペットボトル入りの商品の中でもさらに二〇円ほど高いロイヤルなミルクティーを持ってレジへ並んだ。人からすれば貧乏くさいだろう贅沢でも、心の中はすっきりとしていて、食べ終わったら死ぬ、それも自然と受け入れられていた。

そう。私はこれから死ぬ。家に帰ってしまえば泣くかも知れないから、その辺にある公園のベンチでケーキを堪能し、それを食べ終えたら誰にも告げずにさよならをする。死に方は色々と考えた末に高い所からの飛び降りにしようと決めていた。いかにもそれっぽいし、失敗も少ないし、何よりお金が掛からない。最後の最後まで情けない話だけれど、逆にそれが今となっては気楽だった。

「あ、ポイントカードお持ちですか」

癖っ毛で眼鏡の店員に聞かれ、私は反射的に「あ、はい」とそのコンビニの系列店で使えるカードを探した。今更そんなもの貯めたって意味ないじゃないと気付いたのはそれを差し出した後だった。

「お会計は六三六円です」

小銭を出してカウンターに置く。途端に財布が軽くなる。いつもなら不安になるのに、今はむしろ清々しい。お釣りを全て募金箱に入れるのも良いな。

「スプーンは何本お付けしましょうか」

「あ、一つで良いです」

「あ、ありがとうございます」

会話の最初に「あ」って言う人多いな、自分もそうだしな。何となく、目の前の店員に親近感が湧いた。身長はそこそこ高いものの顔はお世辞にも格好良くない。きっと大学生くらいの年齢なのだろうけれどやけに動きがおじさん臭い。教室の中にいても残念ながら中心人物になれなさそうだ。でも、決して悪い人じゃないのだろう。不思議とそう思える雰囲気があった。

「あ、おめでとうございます」

果たしてこの時、私はどんな顔をしていたのだろう。自分が顔を上げて彼を見ていると知ったのは、店員がレジの向こうでびっくりした表情を浮かべていると理解した時だった。

「あ、すいません」
やや気まずそうに彼が言った。私はまだ声を返せずにいた。もしかしたらきつい目つきをしていたのかも知れない。彼はもう一度だけ弁解するように「あの、すいません。でも今日お誕生日ですよね」。
どうして、と私は言った、つもりだった。実際は声になっていたのか分からない。
「ポイントカードを使ってくれた人の中で、誕生日の人がいると表示されるようになったんです。元々はお酒とかの年齢確認用だったんですけど、最近そうなったんですよね」
彼が私の前にあるレジのデジタル画面を指した。確かにそこには〈お誕生日おめでとうございます！〉と華やかな文字が浮かんでいた。その下には〈お祝いにクーポン券を発行します〉とも書かれていた。
「あの、おめでとうございます」
きっと律儀な人なのだろう。或いは馬鹿正直な人だ。彼は再度そう言った。
私は慌てて顔を伏せた。恥ずかしかったからじゃない。
「…あ、すいません」と言う彼の表情は見えなかった。でも、分かった。多分、私の態度に彼は私を怒らせたと思ったのだ。或いは気味悪がられたと思ったのだ。
謝らなくちゃと、何故だか絶対にそうしなければならないって気になった。私は怒ったりしてませんと伝えなければいけないと思った。
視界の端からポイントカードが差し出された。
気付けば私はひったくるようにそれとレジ袋を掴んで駆け出していた。レシートもクーポン券もお釣りも全て置き去りにした。ごめんなさいもありがとうも口に出す余裕なんてなかった。
レジ袋とカバンがバシバシと体に当たる。スカートがバタバタとはためく。体育の授業でさえやらない全力疾走のせいであっという間に胸が苦しくなって息が出来なくなる。立ち止まって振り返ればコンビニからまだ百メートルくらいしか離れていない。情けないと思った。そして自分の情けなさに泣けてきた。バクバクと鳴る心臓が、血液でなく涙を送り出すかのように、両目どころか鼻の穴からも水が出てきて道の真ん中で溺れそうになった。息が出来ないことがこんなにも苦しいなんて初めて実感した。それでも私はまた足を動かした。
馬鹿みたいだと思った。いや、馬鹿だなんて分かっていた。だけどそれならせめて最後まで馬鹿馬鹿しいままなら良かったのだ。
単なる偶然だ。それはもしかしたら幸運と呼んでも良い偶然だ。でも、それをそう呼ぶことでまた長い不幸が続くかも知れない。だけど、そうでなくとも後ほんのちょっとで不幸な結末を迎える予定だったのだ。何だかもうわけが分からない。
ずっと変わらなかった何かが偶然一つをきっかけにして劇的に変わるなんて、そんなのは偶然じゃなくて奇跡だ。
私は、奇跡なんて信じない。そんなものを信じるくらいなら最初から命に期限を設けたりしない。もしかして明日は何か素敵なことが起きるかもなんて考えない。だって実際に特別な何かがあった日なんて一度もなかった。
日常の中で染みついた習慣というものは大したもので、私はいつの間にか自分のアパートのすぐ側まで帰っていた。

涙は止まっていた。その分だけ少し息はしやすくなっていた。
空はもう赤から紫に染まっていた。
足は勢いこそ失っても止まってはくれなかった。カバンが体に当たった部分が痛かった。歩きながらレジ袋の中を見たら折角のケーキはぐちゃぐちゃだった。
死に場所に決めていた高層マンションは視界の端に映っていた。やがて私はあっさりとマンションの横を通り過ぎた。
五分ほど歩き、これまで何度となく往復したアパートの階段をまた上った。
分かっていたことだけれど部屋には誰もいなかった。食卓の上にお弁当箱が朝と変わらぬ姿であった。
それを見た途端、自分がとても罪深いことをしてしまったと悟り、堪らず泣いた。泣いてばかりでいよいよ涙も枯れたと思ったのに、どうやら全然そんなことなかった。
震える指で巾着袋の紐を解いてお弁当箱を開けた。そこには相変わらずの卵焼きとサラダ、それから昨夜の食卓とはまるで関係ないおかずがぎっしり詰められていた。残り物なんて一つもなかった。
私は冷蔵庫を開けた。思いっきり扉を引いたせいで揺れる庫内に、見慣れた卵焼きサラダと、昨夜の唐揚げの残りがラップをされてそこにあった。
〈お誕生日おめでとう。今夜は少し早く帰ります。ケーキを買ってくるからね〉
卵焼きの上にはマジックペンでそう書かれた紙が貼られていた。
私は慌てて遅い朝食を冷蔵庫から出し、お弁当と一緒に食卓へ並べた。洗濯機で回したようなケーキはカバンの中へ押し込んだ。まるで一日をやり直すみたいな景色が現れた。
いつも母親が帰ってくる時間までにはまだ余裕があった。でも、今夜はいつもと違って少し早いらしい。とにかく、それまでにこれらを全て食べきらなければならなかった。しかもその後で夕食と、さらにはまだ見ぬケーキまである。
不安はなかった。いや、正直ちょっとあった。でも、そんな私を励ますようにお腹が鳴った。キッチンの水道で汚れた顔と手をまとめて洗った。
「いただきます」
きちんと食事前に手を合わせたのなんて何年ぶりだろう。
ふと気になったけれど、考えている暇はなさそうだった。

〈了〉